



アーレントの全体主義に対する考えから学ぶ：Tグループを定義する足掛かりとして

その他のタイトル	Learning from Arendt's Thoughts About Totalitarianism : Towards a Starting Point for Drawing Up a Definition of the T-Group
著者	石倉 篤, 中田 行重
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	6
ページ	19-27
発行年	2016-03-08
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018758

アーレントの全体主義に対する考えから学ぶ —Tグループを定義する足掛かりとして—

Learning from Arendt's Thoughts About Totalitarianism: Towards a Starting Point for Drawing Up a Definition of the T-Group

石倉 篤 中田行重
関西大学大学院心理学研究科

Atsushi ISHIKURA, Yukishige NAKATA
Graduate School of Psychology, Kansai University

◆要約◆

Tグループ研究ではこれまで多様性に至るプロセスは検討されてきたが、そもそもTグループとは何かという明確な定義がなく、研究の積み重ねがされにくい。定義のためにTグループの世界的な展開を概観し、Tグループのエッセンスをつかみ取ることが求められる。もう一つの方法として、Tグループが生まれた時の思想や価値観などの時代背景からTグループの目的や方法を検討することが挙げられる。本研究は後者の手法を採用。Tグループは全体主義が世界的な問題となった第二次世界大戦後、米国の民主化の流れの中から生まれた。本研究は、アーレントの「全体主義の起源 第3巻 全体主義」をテキストとして、Tグループにおける非全体主義的な組織化の検討を目的とする。テキストからは、Tグループにおいても、今ここの自分の体験に基づいて考えること、自分や集団のイデオロギーやそのイデオロギーを実践する形態であるテロルを明らかにすること、多様な他者の存在を受け入れること、自由な活動のために人間と人間の間の空間を確保すること、一人で居るときに自己を現実のものとして他者との関係で自分のアイデンティティを確立すること、以上の5点が非全体主義に向かう要素の一部だと考察された。

キーワード：Tグループ、全体主義、アーレント

Abstract

Until now, T-group studies have examined the process toward diversity. However, since there seems to be no clear definition of what a T-group actually is, it is rather difficult to build and expand upon the findings of previous research. In order to arrive at a workable definition, it is necessary to take a look at how the T-group has evolved in an international environment and thus, grasp its essence. Another approach towards reaching a definition would be to use the thoughts and values that constitute the historical background of the T-group to examine its

purpose and methods. This research will follow the second approach. The T-group came into being after WW II, at a time when the democratic movement in the United States helped to focus on the problems caused world-wide by totalitarianism. Using Arendt's "The Origins of Totalitarianism, Chapter III, Totalitarianism" as a reference text, this study aims at examining the non-totalitarian structure of the T-group. From this text, five aspects were identified among the elements that bring about the non-totalitarian character of the T-group: to use one's "here and now" experience as a starting point for thinking; to expose the ideology—and the terror that results by putting this ideology into practice—held by oneself and one's group; to accept the diversity of other persons; to preserve a space that allows for free action and interaction among human beings; and to establish—through interaction with the other person—one's own identity that becomes one's true self even in solitude.

Key Words: T-group; totalitarianism; Arendt

I. 問題と方法

Tグループ (Training group) は通常3～6泊程度の合宿形式で行われる。プログラムの中心となる75分前後のTセッションは10人程度の参加者と2名前後のトレーナーによって構成される。セッションでは特定の話題を設定せず、今ここで起きている出来事、内面の移り変わり、グループの動き、などについて、自己開示とフィードバックを繰り返す。そのセッションを、ふりかえり用紙を用いて省察し、その用紙を共有する。また、複数のグループが集まる全体会では、セッションのグループ単位で、Tグループ全体を通した変容の省察や、課題のある構成的なグループが行われる。

Tグループは、全体主義的組織が大きな問題となった第二次世界大戦後、米国での雇用問題における人種差別撤廃のためのワークショップから始まり (Lippitt, 1949)、多文化を大切にすることが重視されてきた。特にTグループの創始者達は、民主的、科学的な価値観や目標を発達させることを目指してきた (Benne, Bradford & Lippitt, 1964)。また、現在の日本でのTグループでは人間の尊厳を実現することと、その為の学びが重視されている (山口, 2005)。この点について、NTL instituteのHuman Relations Training (Tグループ) のハンドブックでは、

Diversity (多様性) というセクションで詳細に検討されている (Cooke, Craig & Greig (Ed), 1999)。また、日本で行われているTグループにおけるトレーナーが提案するねらい (教育目標) でも、他者とともにあることや、他者と相互に尊重しあう関係をつくること、自他の違いを尊重することなどが挙げられている。このように多様性を実現すること、その組織化を学ぶことがTグループの目的の一つと言えよう。

しかし、上述したTグループにおける民主化や多様性に至るプロセスはいくつか検討されているが (例えば, Gallant, 1999)、実際にどのように運営されているかにより、そのプロセスも大きく異なるであろう。運営が様々であるということは、そもそもTグループの主催者や研究者がTグループをどう定義しているかに違いがあるということである。そして研究者によって様々な定義があり、これがTグループだという明確なものがなく、研究の積み重ねがなされにくい。定義をする上で、第一に、これまでどのようなTグループの広がりがあり、それぞれにどのような違いがあり、Tグループがどのようなものと捉えられてきたのかを整理することが求められる。第二に、その時代ごとにどのような価値観やその価値観が共有される学びが求められているのかといった時代背景と、その価値観を実現する方法の検討も求められる。本稿

では、第二のTグループが誕生し普及し始めた時代背景を検討し、どのような価値観や思想が求められていたのかを検討する。そして、Tグループの目的と、Tグループがどのような点で世の中で求められる価値観を実現できる方法なのかを検討する。その方法の一つとして、Tグループで大切にされている価値観とは反対に位置する言動や価値観とTグループを並べ、比較してみたい。そこで、Tグループの理念とは反対の集団である全体主義的な集団を考えてみる。全体主義的組織化を代表とするナチズム、あるいはナチズムとスターリニズムに関する研究の古典であり、歴史的評価のある著書としてアーレント（1981）の『全体主義の起源3』があるが（川崎，2014）、本稿はこの著書を取り上げる。森分（2007）が指摘するように、アーレントは全体主義を克服し、その影響を排した新しい政治秩序の構想を模索していた。本稿では特に彼女の著書の内でも『全体主義の起源3 全体主義』（1981）をテキストとし、全体主義を打破して非全体主義に至るプロセスを理論的に検討し、そこからTグループにおける全体主義を打破する方向に向かう学び方を検討することを目的とする。以下は、アーレント（1981）の記述を要約したものである。尚、〔 〕内は筆者の補足である。

II. 「全体主義」（1981）の要旨

第一章 階級社会の崩壊

全体主義を主導したモップ〔群れをなして集まる人々〕は全体主義支配に至る間、南アフリカを中心に主導権を握り、知識人の指導のもと、〔自らの所属する国家の枠を超越した民族的共同体の形態を求める（森分，2005）〕汎民族運動にもっぱら主導権を握っていた。全体主義が広がり始めた当時の大衆は自分の意見を持っていないため、大衆を説得する必要が無かった。そのため、平和な時のただ中に全体主義化への運動を進めることができた。この時点では敵を殺害

する代わりに、また運動に組織されない人々を説得する代わりにテロルで嚇した。〔テロルは、世界のあらゆる事象を法則的正確さをもって説明する思考様式であるイデオロギーの実践形態である（森分，2007）。〕

大衆をこの全体主義化への運動に巻き込む際、主導者は巻き込む対象者に対して、他の集団の対象者とはその対象者がいかなる共通点も持っていないという前提で関わり、他の対象者との一切の意見の相違は、個人によってコントロールできない社会的、民族的、心理的な差異だとした。〔自分たちは他の集団に属する人たちと相いれることは難しいと信じさせた。〕その結果、第一に、大衆が持つ、自分が支持していない他の政党でも自分の想いを分かってくれるという幻想が消滅した。第二に、大衆が政治に対して中立的であれば、政治に重要性を感じない為に、〔現時点での政治の主導者は〕中立的な自分たちには中立的な立場を保ってくれる、というこれまで抱いていた幻想も大衆の中から消滅した。全体主義的な体制ができあがるまで、各政党は無関心で受動的な支持をあてにしてきたが、全体主義的な体制が誕生しつつある時、民衆は各政党の支持を止め無構造な大衆へと変容した。

そして民衆の一人ひとりとは感情としての没我があり、自分自身など問題でなく、自分はいつでもどこでも取り換えがきくという態度になり、それが一般的な大衆現象となった。その結果、民衆が徹底した「自己喪失」に陥り、自分自身の死や他人の個人的破滅に対して無関心になった。

第二章 全体主義運動

アーレント（1981）は組織的に行う主義の宣伝であるプロパガンダと、テロルについて次のように述べる。全体主義運動において、ある集団が政権を握ると、それまでのプロパガンダに代えて、主導者は自分たちの組織の教義の実現にとりかかる。その実現の過程での動きであるテロルは、無差別に誰にでも向けられる。そして全体主義的な独裁になると、イデオロギーの

教義と、そこから生まれた実際上の嘘を本物の現実に変えるためテロルを使い、テロルは特殊全体主義的な統治形式となる。

第三章 全体的支配

全体的支配のもとでは、自由が廃絶されるが、自由の制限〔の程度〕が問題ではない。自由が廃絶された、強制収容所および絶滅収容所は、人間は全体的に支配され得るものであるとする全体主義体制の基本的な主張が正しいかが実験される実験室となる。全体的支配は無限の多数性と多様性を持ったすべての人間が集って一人の人間を成すかのように彼らを組織することを目指すのだが、すべての人間を常に同一の反応の塊りに代え、その結果これらの反応の塊りの一つ一つが他と交換可能なものとなるまでに持って行かないかぎり、この全体的支配というものは成立し得ない。

エピローグ（英語版第四章 イデオロギーとテロル—新しい統治形式）

テロルは運動法則の実現である。その第一のテロルの目的は、自然もしくは歴史の力がいかなる自発的な行為にも妨げられずに自由に人類に〔運動を〕浸透できるようにすることである。だからテロルは自然もしくは歴史の力を解放するために人間を制止させようとする。そして種のために個を滅ぼし、全体のために部分を犠牲にする。

全体的テロルにおいて、人間のあいだの垣を取り外すことは、人間の自由を奪い、生きた政治的現実としての自由を破棄することを意味する。なぜなら、法律によって囲われている人間と人間とのあいだの空間は自由の生きる空間であるからである。人間たちをぎゅうぎゅう締めつけることによって全体的テロルは彼らのあいだの空間をなくしてしまう。

自然もしくは歴史の運動の従順な僕としてのテロルは、その運動の過程から、何か特定の意味の自由だけではなく、人間の誕生という事実そのものとともに与えられ、新しい始まりを生み出すという能力そのものうちにある自由の

源泉をも取り除かねばならない。人間の行動能力を取り除こうとする全体主義的支配は人間の複数性を消滅させた。

人種主義や共産主義は二十世紀の決定的なイデオロギーとなりはしたが、原理的にそれらは他のさまざまなイデオロギーよりもより全体主義的だったわけではない。これらの主義の基礎となっていた経験が他のさまざまなイデオロギーの持つ基本的経験よりも政治的に重要であることが判明したからにほかならない。

人間は外的な専制に対して頭を下げるときに運動の自由を放棄するが、それと同時にこの論理への屈服によって人間は内的な自由を放棄する。人間の内的な能力としての自由が何かを始める能力と同一であることは、政治的現実としての自由が人間と人間とのあいだにある運動の空間と同一であるのとまったく同じである。

新しい人間が生まれる度に新しい始まりが生じ、世界に呱呱の声をあげては困るというので、テロルが必要とされるが、それと同様に論理の自己強制力も、誰かがいつか思考を始めることこそすべての人間活動のうちで最も自由で最も純粋なものとして、演繹の強制力とはまさに正反対のものなのだ。〔全体主義はその思考が始まらないようにしている。〕

特異な政治体といえども、人間によって発明され、人間の必要性に何らかの形で応じているという意味で、人間的なものであるに相違ない。テロルが思うまま支配し得るのもっぱら互いに孤立させられた人々だけである。そのためすべての専制的形態の第一の関心事の一つはこの孤立を作り出すことだということはいましばしば指摘されてきた。孤立はテロルの始まりである。全体主義以前のものである。人と人とのあいだの政治的接触は専制的統治において断ち切れ、行動し力を示す人間の能力は発揮されずに終わる。しかし人間間の関係のすべてが絶たれ、人間のすべての能力が破壊されるわけではない。経験することや物を作ることや考えることの能力を含めて私生活の領域はそっくり無垢のまま

残っているのだ。しかし全体的テロルが全体主義的論理の自己強制によって人間の行動能力と同じくらい確実に経験と思考の能力をも破壊してしまう。

われわれが政治の領域で孤立 (isolation) と呼ぶものは、社会的な人間関係の領域では loneliness と呼ばれる。孤立と loneliness は同じものではない。孤立は人間生活の政治的領域に関係するにすぎないが、loneliness は全体としての人間生活に関係する。loneliness は人間の条件の基本的な要求に背馳すると同時に、すべての人間の生活の根源的な経験の一つなのだ。物質的感覚的な所与の世界についての私の経験すらも、私が他の人々と接触しているということに、つまり、他のすべての感覚を規制し統制しているわれわれの共通感覚 (common sense) に依存している。[社会の中で関係をつくれない] lonely な人間は他人に囲まれながら、彼らと接触することができず、あるいはまた彼らの敵意にさらされている。これに反して [孤独 (solitude) であっても独りで在れる] 孤独な人間は独りであり、それ故「自分自身と一緒にいることができる」人間は「自分自身と話す」能力を持っている。loneliness をこれほど堪えがたいものにするのは自己喪失ということである。自己は孤独のなかで現実化され得るが、そのアイデンティティを確認してくれるのは、われわれを信頼してくれ、そしてこちらからも信頼することができる同輩たちの存在だけなのだ。

人間の精神の能力で、確実に機能するために自己も他者も世界も必要とせず、経験にも思考にも依存していない唯一のものは、自明性をもってその前提とする論理的推論の能力である。これは人間が経験するため、生活するため、そして共通の世界のなかで保証を失ったとき、すなわちコモン・センスを失ったときにもなお頼ることのできる、唯一の信頼できる真理である。

Ⅲ. 考 察

1. Tグループが誕生した時代にアーレントが克服し実現しようとしていたもの

20世紀の旧ソ連の強制収容所とドイツのガス室に象徴される全体主義組織は、(群れをなして集まる人々あるいは暴徒という意味がある) モップによってつくられたとアーレントは考えている。モップ出身の者は全体主義メンタリティを持ち、周囲との軋轢を生じさせた (森分, 2007)。そのモップは運動を推進し、現代の大衆を動かしたが、アーレントはモップを全階級、全階層からの脱落者の寄り集まりと定義している (川崎, 2014)。

そして、個人や集団にはそれぞれの考え方や、イデオロギー、その実践形態であるテロルがある (森分, 2007)。人々がどのイデオロギーや、それを実践するテロルに対しても等しい距離を取ろうとしている間に、ある一部の考えが、全体を支配する考えに変化する可能性があるとしてアーレントは述べる。その考えはアーレントが指摘するように人種主義や共産主義が全体主義に変化するというものではない。民主主義を唱える集団でも全体主義に変化する可能性はある。主義主張の内容に問題があるのではなく、ある特定のイデオロギーを盲信した人々の行動によって作り出された、他を排斥する全体主義テロルが誕生することに問題がある。そこでイデオロギー的思考は、アーレントが指摘するように、経験から思考が生まれるものでなく、イデオロギーそれのみに沿って思考されるもので、今ここで新たに考えるものでは決してない。そのテロルの特徴として、テロルがさらに「あなた方は特別で、他の方々とは相いれない」と信じさせる。結果自分たちのことはこの政党・集団しか分かってくれない、他の集団は自分たちに中立的な立場を取ってくれないと盲信させ、排他的になる。そして様々な集団を支持する思想的骨格が無くなる。

このように考えると筆者は、平和な時代にこ

そ大衆が、左にも右にも偏らず、中立的な立場をとっている間に、政治や行政が自分たちを理解して、中立的であるという想いを抱き、それが崩されていると気づいた時には、すでに全体主義的な体制ができあがっている、ということが十分にあり得るのではないかと考えた。その時には全体主義的運動の「すべてが可能」であり、「すべてが許されている」状態になる（森分, 2007）。

杉浦（2006）は、全体主義が運動であり、無用な者や有害な者を除去しつづけ、人間の自由な予見不可能な行動を排除する、とアーレントの主張を強調している。全体主義ではその人が所属する集団の教義に従わせる力が働いている。このような個人と集団の関係が存在するが、全体主義が支配する集団では一人ひとりを重んじる多数性や多様性は無きものにされ、無限の多数性と多様性をもったすべての人間が集って一人の人間を成すかのように、一つの塊りとして扱われ、アーレントが言うところの「自己喪失」に陥る。杉浦（2006）も指摘しているが、アーレントは、全体主義体制のもとでは、人間は同じ条件のもとでは常に同じ行動をする人間に作り変えられると述べている。その結果、法的人格が奪われ、道徳的人格が奪われ、最後には個人的特性の破壊がなされる。杉浦（2006）が指摘するように、全体主義のもとでは、人間と人間の間（あいだ）は完全に無くされ、個人の違いが無くされ、間が無い人間には自由の空間が無く、人間同士にも自由は無くなるとアーレントは述べている。全体主義支配のもとでは、個々に異なり、多様性のある人間同士が関わることによって生まれる、多様性のある集団になることが廃絶されている。この実行を行うのがテロルであり、そのテロルを生み出すのがイデオロギーの役割である。全体主義的な組織が成立するのは、すべての人間が常に同一の反応の塊りになり、塊りの一つ一つが他と交換可能なものとなる時である。また、人々が死や個人的破滅に無関心になる時である。

そして人々は関係性や自由を奪われ孤立させられ、テロルはより大きなものとなり、激しいものになる。アーレントは孤立（isolation）とlonelinessを分けている。前者は政治的な関係のみを指し、孤立がテロルを生み、全体主義へとつながっていく。後者は全体としての人間生活に関係する。孤独（solitude）で在りながら自分と向き合うことが私たちの暮らしの根源的な経験のひとつであり、他のすべての感覚を規制し統制している。この自分に対する信頼が欠かせない一方で、世界に対する信頼が欠かせず、両者があって「経験」することができる。アーレントが指摘するように、自己は一人孤独で在ることで現実化され得るが、自己のアイデンティティを確認してくれるのは、信頼しあえる同輩たちの存在だけである。自分らしさは他者との関係によって自覚できると言い換えることができるかもしれないが、アーレントはこの相互性を唯一信頼できる真理だという。つまり、自分と向き合うことと、他者と向き合うことの両者が必要なのである。

2. Tグループにおける全体主義を打破し、非全体主義に向かう学び方

冒頭で述べたように、Tグループは第二次世界大戦を経て全体主義体制が崩壊した時代に、人種主義問題の撤廃と民主化の実現の為生まれた（Lippitt, 1949）。それはアーレントが希求した非全体主義的組織化、を学ぶ場を人々が求めていたからではないか。アーレントは次のように警鐘を鳴らす。「他のさまざまな歴史的時点に生れ、相異なる基本的経験にもとづく他のさまざまな統治形式（中略）が一時的な敗北にもかかわらず人類とともに存続して来たのとまったく同様に、この新しい統治形式〔全体主義〕も一つの可能性として、かつまた永久に去らぬ危険として、今日以後われわれが存するかぎり存続することは大いに考えられるのだ」（アーレント 1981 p.324）。アーレントが言うように、私たちは再度全体主義的な組織に飲み込まれる可能性があるのではないだろうか。そして、T

グループも全体主義を脱却し、民主化や多様化の実現を目指しているが、実はTグループ自体が全体主義に陥る危険性を常にもっているのではないだろうか。

Tグループでは、非全体主義的な組織づくりや、その組織づくりの方法論の学びが促される。その結果、他者と相互に尊重しあう関係になったり、自他の違いを理解し受容し合うことが起こる。しかし、参加者が全体主義的ではない行動をとるように、トレーナーや他の参加者が促すことによって、その促しが一つのイデオロギーになることも考えられる。その場合、自分の気持ちを自己開示するべきだ、求めているフィードバック受けるべきだと、異質に感じる参加者に多数派の在り方を押し付けるといったことがあるかもしれない。そのようにTグループの方法論だけが独立してしまうと、Tグループで本来実現したい価値観とは違うことが起こってしまう。そうすれば新たな全体主義的として参加者を拘束することにつながり得る。また、参加者が、「望ましい」と考えたグループの実現の為に、全体主義的な行動を起こした際に、どのようにトレーナーや他の参加者が受け止めるかも重要なポイントと言えよう。このようなTグループが全体主義的な集団に陥る危険性があるという点を踏まえた上で、以下、アーレントの叙述を検討した結果考えられた、Tグループにおける全体主義を打破し、非全体主義的な組織化に向かう5つの学び方を述べる。

第一に、今ここの自分の経験（体験）に基づいて考える機会が与えられていることである。仮にTグループにおいて、グループプロセスだけでなく、今ここで起きている自分のプロセスに焦点が当てられることもなくなると、いつでもどこでも当てはまるような考え方に基づくことや、他者からこうすべきだと言われたことをすべきだと思って行動をとったりすることが生まれるかもしれない。Tグループで大切にされているのは今ここで自分がどう想っているのかに気づき、自分の本懐を尊重して、どう行動す

るかを考え抜き、行動することではないだろうか。一方で、今ここのプロセスについてのみ話さなくてはならないというのも全体主義につながっていくであろう。今ここのプロセスを語り、フィードバックを受けるというTグループの学び方のみに価値があるというグループになれば、過去の出来事の内容を語り自分の内面を理解し受容する過程を阻害する恐れがある。あくまでも「機会がある」ことが大切なのであろう。

第二に、各個人や集団のイデオロギーやそのイデオロギーのテロルを語る機会があることである。どの個人や集団のイデオロギーに対しても中立的な立場をとろうとしている間に、あるサブグループのイデオロギーは拡大し、他の参加者やトレーナーにそのサブグループしか自分たちのことを分かってくれない、富をもたらししてくれないと誘いかける。気づいた時には、全体主義的運動の「すべてが可能」であり、「すべてが許されている」状態になっているかもしれない。自他がどのような考えに基づいて在るのかを明確にせず、自分のイデオロギーを語ることができない場であったならば、自分の集団で起きていることや、自分たちが実現したいことの可能性に気づけないおそれがある。それはグループプロセスを語り合うTグループ体験で大切にされているものと相反するものではないだろうか。今ここでは「グループについて言いづらい」と言うことも語れる場になることも大切なのであろう。一方で、自分のイデオロギーやグループプロセスについて語る事を強制することも全体主義につながるおそれがある。例えばふりかえり用紙にはグループで起きた事で自他に影響を与えたと思うことを記述する欄があるが、まだグループプロセスをセッションの場で語れていない状態で記述させられることにためらいを持つ参加者がいるかもしれない。

第三に、自分とは「異なる」他者の考えや行動を受け入れる機会が与えられることである。人は一人ひとり異なるため、他者を受け止め難い状況が当然あるだろう。アーレントが指摘す

るように、全体主義は人々を一つの塊りのように扱い、同じ条件の下では同じ動きをするモノに仕立て上げる。その結果、無限の多数性と多様性の実現ができなくなると考えられる。Tグループでは、目の前に居る人を、一人ひとり異なる個人として関わり、尊重してゆく（山口, 2005）。しかし、他者を尊重できない、受容できない時もあるだろう。受容できないままセッションを終えることもあり、その体験こそが大きな学びに繋がることもあるだろう。他者を受容できない参加者を非難するのではなく、他者を尊重できない参加者自身についての気づきを促したり、待つことも学びを生むものの一つである。また、他者を受容できないことに折り合いをつけていく体験も大切なのであろう。

第四に、自由な活動の為に、人間と人間の間の自由な空間が許されている事である。全体主義は人間間の空間を奪い、自由な行為ができない環境をつくる。この環境がつけられる事によって、人々が自分の意志で、自分の責任で、自由に活動する場が生まれないと考えられる。Tグループでは課題の無いセッションに代表されるように自由な学びと思われるが、学びの目的や構造等、決められている事は多数ある。その制限に対する不満を語り、学びの構造を場に応じて変えていく事ができることも大切なのであろう。現在のTグループでは毎夜全スタッフが集まり、その日の様子や参加者からの要望を省みて、翌日のプログラムを考える流動的な研修となっている。

第五に、一人で居るときに自己を理解し、受容し、他者との関係で自分のアイデンティティを確立する場がしつらえられていることである。合宿で行われるTグループはプログラム以外の時間も研修に含まれる。一人の時間になり、それまでのTグループ体験をふりかえり、プロセスを理解する。その時、孤独な状況の中で、自分がどうしたいのか、どう在りたいのかという根源的な問いを自らに問いかけ、そう在ろうとする。一方で、他者との関わりで他者から自分

がどのように捉えられているのかをフィードバックしてもらい、自分を理解し、アイデンティティが再形成されると考えられる。これがアーレントが言う唯一の真理である。この営みを妨げる要素が全体主義にある一方で、Tグループでは孤独で在ることと他者との関わりのもつ両方とも大切にされているのではないだろうか。ただし、一人で考えろと参加者を突き放したり、逆に一人で居たい参加者や一人で自己に向き合うことが必要であろう参加者に他者に関わるよう求めることは全体主義へ進む道かもしれない。

IV. 終わりに

本稿ではTグループが誕生した頃に求められた民主的な価値観がどのような背景から生まれたのかを検討し、全体主義に陥る可能性のある集団や、そこでのプロセスを考察してきた。また全体主義に相反する非全体主義的な組織や集団作りを学び方として検討した。

本稿で述べた、全体主義を打破し、非全体主義的組織化を実現する学び方（方法）は以下の5点である。今ここの自分の体験に基づいて考えること。自分や集団のイデオロギーやそのイデオロギーのテロルを明らかにすること。多様な他者の存在を受け入れること。自由な活動のために、人間と人間の間の空間を確保すること。一人で居るときに自己を現実のものとし、他者との関係で自分のアイデンティティを確立すること。これらを個人に強制して全体主義の実現を防ぐのではなく、参加者が試みる場をつくることは、Tグループの実践に含まれているのだろうか。尚、Tグループでは参加者が実験的な関わりを試みる機会が与えられており、その関わりは他者から強制されるものでなく、自発的・主体的なものである（津村, 1998）。Tグループは全体主義的なグループに陥る可能性があると同節Ⅲ. 2. で述べたが、筆者の経験では、グループの形成段階でお互いの価値観を押し付け合い、全体主義に陥りそうになることが大いにあ

り得るが、そこから非全体主義に移行していく過程があった。この過程を体験することこそがTグループ体験を通じた、グループプロセスからの大きな学びなのかもしれない。

そして、非全体主義的な組織化を目指すTグループの目的は何だろうか。まず、アーレントは全体主義組織の実現において新しい人間が生まれるたびにテロルが必要だと言うが、Tグループに参加することによってテロルに屈しない人に再生 (reborn)・変容していくことが期待される。しかし、Tグループの目的は、Tグループの中で非全体主義的な組織化を実現するという結果を実現することなのだろうか。筆者は必ずしも実現できない場合があってもよいと考えている。なぜならTグループ終了時点で結果を出すために何かをしようとすることで、繰り返し述べるが非全体主義的なイデオロギーを押し付けることになり、一種の全体主義が生まれてしまう為である。非全体主義的な組織化を目指しつつ、上述した5点の全体主義的組織の特徴を打破する為の方法にあるような、自己開示とフィードバックのやり取りを繰り返し、体得し、そのことの価値を実感することを教育のプロセスの目標とする。そして、日常生活でも、自己開示とフィードバックを続けてみようと思うことをTグループ終了時点の結果としての目標の一つとして考えることができよう。

今後の課題は、第一にTグループの実践における強制的でない自発的な参加者の試みを今後の実証研究で検討することである。第二にTグループの目的や各流派の流れなどを整理することである。

文 献

- Benne, K. D., Bradford, L. P., & Lippitt, R. (1964): 2 The Laboratory Method. Bradford, Leland P., Gibb, Jack R., and Benne, Kenneth D. (Ed.), *T-group Theory and Laboratory Method*. New York, John Wiley & Sons, Inc. pp.15-44.
- Cooke, A. L., Brazzel, M., Craig, A. S., & Greig, B.

- (1999): *Reading Book for Human Relations Training 8th Edition*. Virginia, NTL Institute.
- Gallant, G (1999): Cultural Assumptions in Cross-Cultural Relations. In Cooke, A., Brazzel, M., Craig, A., and Greig, B. (Ed.) *Reading Book for Human Relations Training, 8th Edition*. Silver Springs, NTL Institute, pp.103-109.
- アーレント, H. (1981): 『全体主義の起源3』 みすず書房.
- 川崎修 (2014): 『ハンナ・アーレント』 講談社.
- Lippitt, R. (1949): *Training in Community Relations*, New York, Harper & Brothers.
- 森分大輔 (2005): 国民国家とナショナリズム —ハンナ・アーレントのナショナリズム論— 『国際基督教大学学報』 II-B, 社会科学ジャーナル (54): 139-162.
- 森分大輔 (2007): 『全体主義の起源』とアーレント政治思想の課題 『国際基督教大学学報』 II-B, 社会科学ジャーナル (62): 101-125.
- 杉浦敏子 (2006): 『ハンナ・アーレント』 現代書館.
- 寺島俊穂 (2006): ハンナ・アーレントの政治概念の再考 『關西大學法學論集』 55 (4/5): 955-998.
- 津村俊充 (1998): 自己啓発セミナーとマインド・コントロール—Tグループを用いた人間関係トレーニングと似ても非なるもの— 安藤清志・西田公昭 (編) 『マインド・コントロール』と心理学 現代のエスプリ No.369』 至文堂. pp.182-195.
- 山口真人 (2005): Tグループとは 津村俊充・山口真人 (編) 『人間関係トレーニング [第2版] 私を育てる教育への人間学的アプローチ』 ナカニシヤ出版 pp.12-16.